

埼玉の夜明け

巻号 42
第3号
通算132号

団地教会
埼玉地区
キリスト教
委員会
関東社会
日本東社

キリストはわれらの希望

(ローマ八・一八〜二五)

青山学院大学名誉教授 関田 寛雄



はじめに

「二・一一集会」は本来信教の自由と平和を祈り求める集いですが、昨年の東日本大震災の事を抜きにしてはキリスト教会としての今日的発言はあり得ないと考え、今日はそのような方向でお話をいたします。

一、東日本大震災被災地を訪ねて

——「共にうめき共に苦しむ」

(ローマ八・二二)

昨年七月半ばに機会を得て新釜石、大船渡両教会を訪ね、陸前高田の現場に接して来ました。地震と津波の災害の跡は尚生々しく、特に新生釜石教会の門扉には「今は祈りの時」との張り紙が深く胸に刻まれました。牧師自身が避難所生活を続けながら支援物資の配布、ボランティアの労働奉仕の企画、派遣に忙殺されている姿を眼にし、今日の聖句、「共にうめき共に苦しむ」という御言葉が迫ってきました。傷ついた教会が傷ついた街の人々の癒しの場に

なっており、教会という組織を越えて町の人々の拠り所になっているという事態の中に身を置いて、「ここに主の教会がある」と実感いたしました。聞いた話ですが、新婚一年の、ある学校の教師である妻が行方不明となり、別の学校の教師である夫は全てを流出され、残ったのは妻がその朝作ってくれた弁当箱だけであったそうです。

二、「神の沈黙」

——不条理の世界

このような悲しい状態が至る所に起こっているとき、私たちは「何故だ」「どうして?」という言葉しかでて来ません。まことに不条理の世界です。「どうして?」という眩きと共に被災地の惨状の中を歩きつつ気付かされた事があります。それは主イエスの十字架上での叫びです。「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか。」神学生の頃、この言葉は詩篇第二二篇の冒頭の句であった、本来は神への信頼の歌であり、主は十字架にかかりながらも神への信頼を失わず、この言葉を聞かされたのだ、という説明を聞かされました。そうでしょうか。私はむしろここで人生の絶望的な

事態に追いつめられた人々と一つになって、「なぜですか、神様!」と絶叫されたのではないのでしょうか。沈黙を続ける神に対して全人類的な究極の不条理の中からの叫びを、私どもの為に私どもに代わって、私どもに先立って叫んで下さっているのではないのでしょうか。「事実、御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人々を助ける事がおできになるのです。」(ヘブライ二・一八)「この大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯さなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭われたのです。」(ヘブライ四・一五)

なっており、教会として「救い主」と仰ぐべきではないでしょうか。人生の不条理についての説明や答はありません。教会としては、私どもと一つになって苦しんで下さる主の慰めをこそ、罪の赦しと共に福音として語るべきではないでしょうか。

三、神の答としての「復活事件」

——復活事件

十字架の主の叫びにも沈黙を続けられた神は遂に答を発せられました。それは言葉による答ではなく、主イエスの「復活事件」という形で答えられたのです。罪深い人間の手によって否定された主イエスの存在を神は肯定されたのです。それが「復活事件」の意味でありましょう。主イエスは徹頭徹尾、神の使命に生き抜かれ、「十字架の死に至るまで従順」(ピリピ二・八)であったのに、この世は主イエスを否定し、神は沈黙されたままでした。しかし遂に神は主イエスを復活させられました。注意したいのは主イエスが自力で復活なさったのではなく、神によって復活させられたのです。主イエス御自身が神による復活の恵みに先ず第一に与られ、そして私たちの復活の「初穂」(一コリ

ト一五・二〇)となられたのです。使徒パウロは申します。「アダムによって全ての人が死ぬことになったようにキリストによって全ての人が生かされることになるのです。」(一コリント一五・二二)あの津波の激流の中で海に流された人々、建物の倒壊により圧死せざるを得なかった人々、そして私たちもまた、この復活の約束につつまれているのです。「全ての人キリストに在りて生くべし」と。ここに「われらの希望」があります。しかしキリストの復活の体は

「傷だらけ」であつた事を忘れてはなりません。キリスト復活の日の夕方、ユダヤ人たちの攻撃を恐れて弟子たちは隠れ家の中に閉ぢこもっていましたが、主イエスが中に立ちたもうて、「平安あれ」(文語ヨハネ二〇・一九以下)と言われて「手とわき腹」とをお見せになりました。それは弟子たちが主を見捨てて逃げ去つた後、主が独り数々の暴行と共に十字架上で受けた傷あとに他なりません。その傷を眼にして弟子たちは自分たちの罪、弱さ、不甲斐なさを主の前で思い知らされた事でしょ

う。しかし主は「安かれ」と言われます。その言葉の中には弟子たちへの赦しが響いていたことでしょう。弟子たちは涙ながらに喜んだのでした。(ヨハネ二〇・二〇)私たちの復活も東日本大震災の傷を始めとする様々な傷だらけの復活であるでしょう。その傷を見る度に復活の恵みを思うべきであります。

四、人災としての原発事故

地震と共に生じた福島原発の事故は明らかに人災というべきものでしょう。「原子力平和利用」と「安全神話」と共に発展した原発の恐ろしさをこれ程深く知らされることは思いもかけませんでした。広島、長崎、第五福龍丸の放射能の災害はアメリカからのものでしたが、この度は日本人の手による日本人の災害です。ここで示される事は現代日本の文明のあり方です。戦後急速に成長した経済的豊かさは日本社会に物欲と傲慢を呼んだ上、更に豊かさを求めるために使用済燃料の処置もできないままに五四基の原発を造つてしまいました。これはブレーキの利かない車を発進したようなものです。一方で国家財政の赤字が増え続けるのに平和憲法を持つ国は自衛隊の費用を削減する意志が全くありません。かつて「足るを知る者は富む」と言った中国の老子の言葉を噛みしめたいものです。今、「見張りの務」が教会に求められているのです。

唯「本物」の信仰に生きるかどうか「鍵」であると思います。前大戦中、少数派の無教会の南原、矢内原両先生のような「本物」の信仰者の働きが歴史をゆさぶるのです。今日の開会礼拝で語られた、「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」(ルカ一一・三二)という御言葉の通りです。「本物」は少数者こそが創り出すのです。だからと言って、伝道しなくても良いわけではありません。一人でも信仰の仲間を増して行きましよう。

主張

今、私たちの国を含め先進国と言われるアメリカやヨーロッパの国々の多くが、巨額の財政赤字を抱えて、急速に力を失いつつある。変わって新興国と呼ばれる中国、インド、ブラジルといった国々が急成長し、世界の経済を支えている。しかし、こうした国々も楽観はできない。先進国の経済悪化は、こうした国に輸出をしている新興国にも陰を落とすはじめているからである。

昨年十一月、ブータン王国から若いワンチュク五世夫妻が来日し、話題になった。この国が二〇〇五年に行った国政調査で、国民の九七%が「幸せ」と答えたという。一九七六年よりブータンでは、経済の豊かさを表す国民総生産(GNP)や国内総生産(GDP)ではなく、健康や教育、精神的な幸福といった九項目を調査し、国民総幸福

量(GNH)を測っている。経済的に決して豊かでない国で、こんなに多くの人々が「幸せ」と答えるのはなぜだろうか。物質的に多くを求めないチベット仏教の信仰によるものとも言われる。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。」(ルカ六章二十節)この「幸い」は、神との交わりが人々にもたらす幸いのこと、「貧しい人々」とは、神との交わりを心から望む人々のことである。物質的な豊かさを追い求め、それを一時享受した私たちですが、そのことで大切なものを失っていたのかもしれない。GNPが一番でなくてもいい、今、小粒だけれど多くの人が「幸せ」を実感できる社会づくりを目指す良い機会ではないか。そうした意味での先進国をめざしてはどうか。

五、キリストは

われらの希望

今回の聖句の「忍耐して待ち望む」(ロマ八・二五)をしつかり受けとめたいと思います。日本の教会は少数派です。しかし少数である事を嘆く必要はありません。

宣教の方向性は復活の主が示してくださいました。「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる。」(マルコ一六・七)復活の主にお目にかかりたいのなら、「ガリラヤへ行け。」ガリラヤはユダヤの「辺境」とされた地です。ユダヤの国では差別され疎外された地です。(ヨハネ二・四六、七・七・四一、七・五二)しかし復活の主は先立ってそこにおられるのです。今日、日本の「ガリラヤ」はどこでしょうか。そこで復活の主にお会いいたしましょう。「われらの希望なる」主キリストに。

関東教区
「靖国大皇制問題学習会」
報告

浦和東教会牧師 永井二三男

二〇一一年十一月十四日に、大

宮教会を会場に行われ、私も埼玉地区の同委員として出席いたしました。当日の発題は、同委員でもある、森野善衛門先生と内山一兄のお二人、森野先生の題は「三・一一と天皇制を考える―新しい戦前を来らせないために」であり、①三・一一をどう受け止めるか、②関東大震災とその後、③三・一一とその後、④新しい戦前を来らせないために、の各区分に分けて発題されました。

三・一一のような災害時や非常時には、大きな社会不安が広がり、民衆は強力な統率力を、お上に期待する心理が働きやすいとし、関東大震災での例として、風評デマ、それに反応する民衆、その延長線上に生じた朝鮮人虐殺、さらにはそうした不安・心理・社会状況に應じる形での、政府による天皇の名による戒厳令、国策の強化、戦争への道が進められたという趣旨をかたられました。そして今、国民主権の立場に

たつて考えると、天皇の政治利用が問題になると提起された。そういえば、首相・大臣等の被災地、避難所訪問とならんで、天皇夫妻の訪問が大きく、マスコミ・テレビなどで報道されていたことを思い出します。

続いて内山兄が、「靖国神社のいわれ」について発題されました。前半は、靖国神社の成立の歴史の経過を説明し、前身の招魂社が明治二年に、明治天皇の勅令によつて建てられやがて、明治十二年に富国強兵の国策のもとに、国のために死んだ人々を英霊として祭る靖国神社として、別格官幣社となった旨かたられました。(また、資料として、靖国神社問題の歴史、を添付)

後半では、特に中曾根康弘元首相以後の首相・官僚の靖国公式参拝に関する司法判断の歴史についての発題となり、司法判断は違憲(ないし違憲の疑い)が主流であることを紹介された。また、いわゆる靖国神社にささげる玉ぐし料の公費支出問題、岩手靖国神社訴訟や愛媛玉ぐし料訴訟にも触れ、特に前者は(天皇、首相の公式参拝は、目的が宗教的意義を持ち特定の宗教への関心を呼び起こす行為。憲法の政教分離

原則に照らし、相当とされる限度を超えるものと判断せざるをえない)(仙台高裁)と明確に違憲と断じた。岩手県の上告を最高裁が却下しているので、仙台高裁の判決を持つて確定しており、ここで示された憲法判断は現在も重要な意味を持つと強調された。更には、二〇〇一年の小泉純一郎首相のいわゆる私的参拝にも話が及びました。

両氏の発題後には、出席者との質疑応答が行われました。私自身初めての靖国大皇制問題学習会でしたが、こうしたことが語られていることを知りました。私は一九六〇年代前半の生まれですが、賛否の立場はともかくとして、より若い世代に興味・関心を持ってもらうにはどうしたらよいか、なあと思いつつ帰途につきました。

本庄九条の会に
参加して

本庄教会 堀越 徹也

「日本国憲法・第九条」を守る、この一点において結成された本庄九条の会は、今年で九六年を迎えます。二〇〇六年六月十日の結成大会当日には、全国の九条の会事

務局長である小森陽一氏をお迎えし、あいにくの雨模様にもかかわらず、市内外より六百名を超える参加者のもと、その第一歩を標しました。

発足当時の会員数は約百五十名ほどでしたが、現在は三百五十名を超えて、呼びかけ人に名を連ねていただいている方々も五十名にのぼります。

九条の会は全国各地において約七千を超える「会」が存在しますが、これはそれぞれ地域ごとに作られた単一組織で独立しており、中央集権的な上意下達機関ではありません。

地域間どうしのつながりにつきましても、本庄・児玉郡内には四つの「会」が存在しますが、お隣の深谷・大里郡内にある九条の会と「大里児玉郡市九条の会連絡協議会」を結成し、定期的に意見交換会や平和学習会等を開催して交流を深めております。

本庄九条の会は「戦争体験を語る会」や「憲法学習会」などを開催し、毎回多くの市民の皆様にご参加頂いております。講師陣も多岐にわたり、詩人のアーサー・ビナード氏や、「世界が百人の村だったら」の翻訳家として知られる池田香代子さんをはじめ、様々

な方々がそれぞれの立場で、憲法や平和への想いを語っておられます。

一昨年私は本庄教会より、埼玉地区社会活動委員会に委員の一人として参加させて頂きましたが、同じ委員の皆様の中にもそれぞれの地区の九条の会の会員として活躍されておられる方もいて、互いの地域での運動の取り組み方などお話しさせて頂く機会があり、とても参考になりました。

冒頭でもふれましたが、九条の会は思想・信条の違いを超えて「憲法九条を守る」この一点のもとに結成された「会」であり、主義主張にとらわれることなく、幅広い人達が活動しています。現在国会においては衆参両院に憲法審査会が設置され、改憲に向けた動きがあります。私達はこうした報道に一喜一憂することなく、これからも草の根ネット・ワークをフル活用して、平和憲法擁護、九条改悪阻止のため、さらなる会の拡大と運動の進展に向けて参りたいと思っております。



書評

『鉄は魔法使い』

畠山 重篤著(小学館)

前北川辺伝道所牧師

柳下 仁

「森は海の恋人」という言葉をご存じの方は多いでしょう。海の生物、海藻や貝類や魚たちが元気に育つには、海にそそぐ川の流れが豊かであることが大切で、そのためには上流の森に豊かな広葉樹林がなくてはならないことを表した表現です。この言葉で人々の目を覚ませ、川の水をきれいにしなければならぬことを教えた上、二十年以上前から各地の川の上流に盛んに植林運動を進めた畠山重篤さんが「森は海の恋人」にはどんな意味があるかを説き明かした新しい本を著しました。それが『鉄は魔法使い』です。

畠山さんは、カキの養殖に当たって、川が海に注ぐ汽水域でなければ美味しいカキが育たないことを知りました。カキは一日にドラム缶一杯ぶんもの海水を吸ったり吐いたりしながら、植物プランクトンを食べて育つのです。森と

川と海を一つのものとして考えることが大切だということは分かりましたが、森と川と海がどんな物質で繋がっているかを調べるのが次の段階でした。遠くにいる特別な研究者を訪ねて細かな話を聞いたりして、いろいろ勉強しました。そして分かったのは、「森林が海に鉄分を供給している」ということでした。人間が健康な生活を送るためには、血液の成分として鉄分が欠かせないことは常識です。若い女性が青白い顔をしていると、鉄分不足じゃない？と言われたりします。人間や動物ばかりではなく、実は植物にも鉄は絶対必要だということはあまり知られていませんでした。中学生のころ、カキの種がよく育たないとき、カキ博士・今井丈夫さんから「森に行って腐葉土を取って来て入れなさい」と言われて、森には魔法使いがいるのかなあと思っていたことを畠山さんは思い出しました。その魔法使いとは鉄だったのです！森林に雨が降ると、下の地中の鉄を溶かして鉄入りの地下水になり、腐葉土の中のフルボ酸と結びついてフルボ酸鉄となります。フルボ酸鉄の鉄分は植物プランクトンや海藻によく吸収されるのです。畠山さんは日本がたくさ

んの鉄鉱石を輸入しているオーストラリアの鉄鉱山を視察してみたり、鉄炭団子(鉄の粉と炭の粉を糊をつなぎにして焼いたもの)を磯焼けで不毛だった海にまいて海藻を増やしたり、いつも好奇心いっぱい研究を続けています。

畠山さんの本業は、宮城県の気仙沼湾でカキ、ホタテの養殖をする漁師です。その一方、子どもたちを海に招いて海と森を知る体験学習をさせ、京都大学フィールド科学教育研究センター社会連携教授として、大学生に海の魅力を教えています。

(『鉄は魔法使い―命と地球をはぐくむ「鉄」物語』二〇一一小学館)

社会委員会報告

◎第四回委員会

日時・一〇月一六日(日)

場所・上尾合同教会

(出席八名、欠席二名)

開会礼拝・本間牧師

議事内容

●第三回議事録承認

●委員長よりの報告

①八・一五集会内容をホームページに掲載。

②委員長が九州地区と沖縄教区との会合に出席予定

●二・一一集会について

日時・二月二一日(休日)

一〇時～一二時

場所・大宮教会

講師・関田寛雄先生

司式・開会礼拝・飯野敏明牧師

総合同会・本間一秀牧師

●小委員会報告

環境問題では来年度も六ヶ所村

の見学だけでなく原発問題に取り組んでいく。その他

◎第五回委員会

日時・一月一五日(日)

場所・埼玉和光教会

(出席九名、欠席二名)

開会礼拝・本間牧師

●第四回委員会議事録の承認

●二・一一集会の各委員の役割、準備について確認。

●集会後、同じ場所(会堂)で一時間延長可能かを大宮教会に確認する。

●新年度の委員補充について

●新年度の社会活動委員の派遣を各教会、伝道所に要請する。

●新年度の活動予定

①第一回委員会

・四月三〇日(休) 川口教会

②第二回委員会、第一回社会活動委員会・六月一七日(日)・川口

③第三回委員会、社会活動委員会

・一〇月二一日(日)・上尾合同教会

④環境問題講演会

講師・片岡夫妻(若松栄町教会)

演題・原発問題

⑤八・一五集会

講師・村椿先生

教会

③第三回委員会、社会活動委員会

・一〇月二一日(日)・上尾合同教会

④環境問題講演会

講師・片岡夫妻(若松栄町教会)

演題・原発問題

⑤八・一五集会

講師・村椿先生

◎二・一一集会報告

二月二一日(土)

一〇時～一二時・大宮教会

講師・関田寛雄先生

講演題・「キリストはわれらの希望」

参加者一〇二名(地区内二九教会、集会所 他地区四教会)

編集後記

三月十一日、巨大地震と大津波そして原発事故により東日本太平洋沿岸地域は大災害に見舞われてしまった。

あれから一年、復興は徐々に進んでいるようであるが、廃棄物処理や放射能除染作業はまだまだ手探り状態だ。被災された方々の苦難は計り知れない。共に歩む私達、継続的に支援の輪に加わっていったらと思っています。(浅子)